2024年（令和6年）
9月号（No. 952）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

青森県・下北半島の恐山に残る山岳修行僧円空の行跡

東海支部　清水克宏

生涯に12万体もの「円空像」を彫ったとも言われる山岳修行僧円空。円空の足跡を全国に追って調査している清水会員による、「北海道編」に続く歴史探検の第2弾。今回の舞台は下北半島の霊山恐山で、60年余りの間、行方不明になっていた文献を紐解いて再発見された円空の行跡とは……。

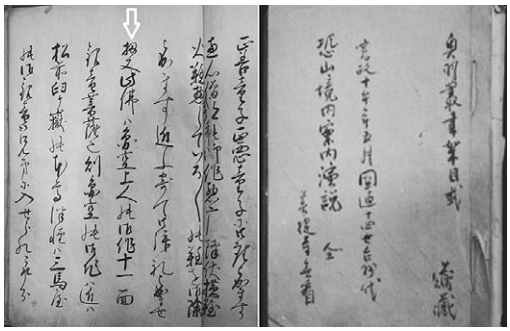
本会報2023年12月号で、江戸前期の山岳修行僧円空の、当時蝦夷（えぞ）と呼ばれていた北海道での寛文6（1666）年を中心とした先覚的冒険者としての活動をレポートしました。円空は、蝦夷への往復に当時、日本海側は弘前藩、太平洋側は盛岡藩だった青森県を巡っています。そのうちここでは、60年間余り失われていた文献の再発見により新たに浮かび上がってきた、当時は「焼山」と呼ばれていた恐山（おそれざん）における円空の行跡にスポットを当てて追跡します。

青森逗留の事情

青森県での円空の動向については、弘前藩の正式な記録である『弘前藩庁日記』の寛文6年1月部分に、「円空と申旅僧壱人長町ニ罷有候処ニ御国ニ指置申間敷由被仰出候ニ付而其段申渡候所今廿六日ニ罷出青森へ罷越松前へ参由」という記述があることが知られています。従来、同日記のこの部分だけに着目し、旅の僧円空が、弘前城下の長町に滞在していたのを役人などに怪しまれ、城下から追い払われたように受け止められてきました。しかし、同日記を通読すると、そこには特別な事情があったことが浮かび上がります。

当時、江戸幕府は、島原の乱以降進めていた宗教統制をさらに強化し、寛文4年、諸藩に宗門改役を設置させています。同日記も寛文5年の年明けから、藩内で徹底的な切支丹穿鑿（きりしたんせんさく）を行なった記述で埋め尽くされています。国境の碇ヶ関や、年貢米を上方（かみがた）で販売するため夏を中心に運航されていた「敦賀（つるが）廻り御船」などによる入国も厳しく統制されていた状況がうかがわれ、たとえば、碇ヶ関で怪しい山伏が追い返されたことまで逐一記録されています。

円空に関してはこのような記録はなく、松前藩に向かうため、近江商人の仲介で「敦賀廻り御船」あ



約60年ぶりに発見された『恐山境内案内演説』
提供：青森県立郷土館

目　次

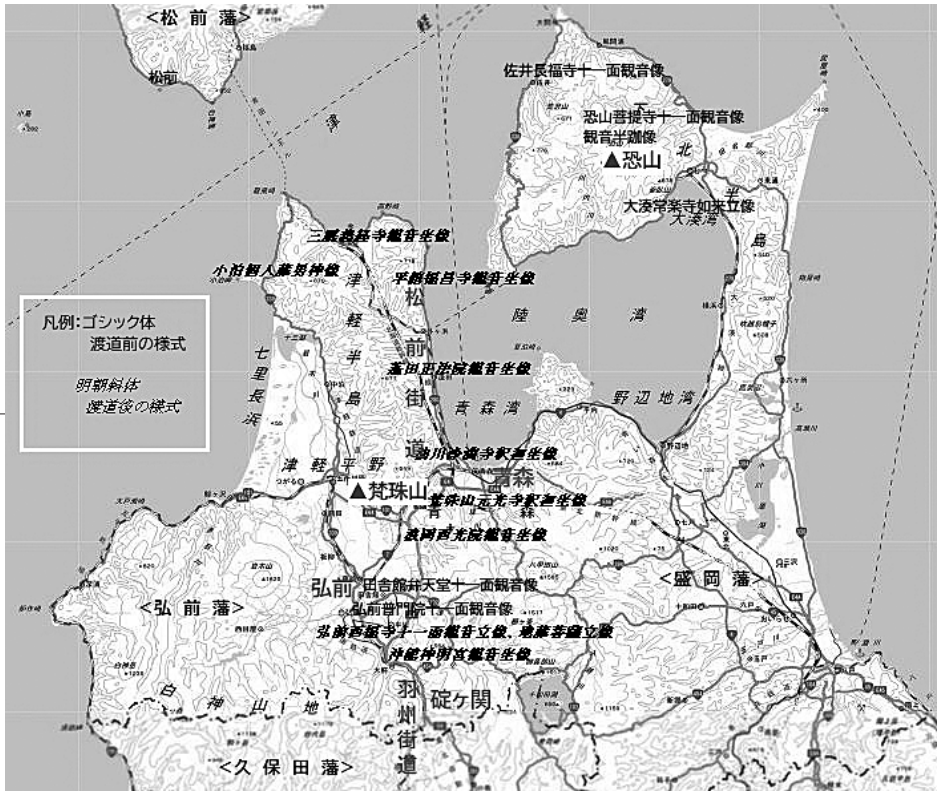
青森県・下北半島の恐山に残る
山岳修行僧円空の行跡 ……1
ネパールのG・H・Tも最終局面
シミコットから西端のヒルサへ ……4
温故知新の山旅G・H・T
ネパール・エリアの踏査を終えて ….7
第8回「山の日」全国大会が
東京・八王子市で開催される ……8
山の名著再読 ……10
活動報告
　記念事業委員会
　上高地クラブ ……12
Climbing&Medicine・91 ……13
支部だより
　東九州支部 ……14
10～11月開催の山岳祭のお知らせ …15
図書紹介 ……16
会務報告 ……16
ルーム日誌 ……17
新入会員 ……17
INFORMATION ……17
編集後記……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 …… 10～20時
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
第2、第4土曜日 …… 閉室

るいはこれに従う傭船を利用し、寛文5年夏ごろには問題なく入国したと見られます。そして、蝦夷松前（福山）藩側でも、同年には日本海側に11ヶ所も堂舎を建てて円空を迎え、ご神体を造顕させる準備を進めていたことが、『福山秘府』の「諸社年譜並境内堂社部」からうかがわれます。

それにもかかわらず、円空が年の改まるまで半年余りも蝦夷に渡れず足止めを食らったのは、同年7月5日に松前藩第四代藩主・松前高広が23歳の若さで突然亡くなり、第五代藩主・矩広が将軍に謁見するため家老・蠣崎蔵人とともに江戸に向かうという、予期せぬ事態が生じたためと考えられます。

円空はこの足止めの期間も無駄にせず、当地の豊富なヒバ材を使って造像修行に励んだようで、等身大を超す十一面観音像などが弘前藩領の弘前城下、田舎館村、そして、盛岡藩領だった下北半島の恐山菩提寺および佐井村長福寺などに残されています。なかでも山岳史に関わる行跡として注目されるのが、十一面観音立像と観音半跏像が伝わる、当時は焼山と呼ばれていた恐山での活動です。



青森県内の円空像分布図

焼山（恐山）の円空

恐山というと「死ねばお山さ行ぐ」と言われるように、死者の魂が行き着く山岳霊場として知られます。しかし、「恐山」という山はなく、カルデラ湖である宇曽利山湖周辺の釜臥山（878m）をはじめ下北半島の中央部の山々がそう総称されているものです。宇曽利山湖周辺は活火山らしく、現在も地面からガスや水蒸気、温泉が湧き出て湯気が立ち昇り、霊界を彷彿させます。

恐山信仰の始まりは明らかではなく、伝説や縁起によれば、9世紀に第三代天台座主・円仁が開いたものの、その後荒廃し、16世紀中期に曹洞宗の円通寺（むつ市田名部）を開山した僧宏智聚覚が再興したとされ、同寺は恐山菩提寺の本坊となっています。

しかし、17世紀以前の信頼できる史料は確認されておらず、最初

現在の恐山菩提寺。中央の地蔵殿に円空像が２体安置される

期の資料は、明暦3（1657）年7月9日の棟札の写しで、恐山山地の最高峰である釜臥山の本地仏である釈迦如来像を円通寺に祀り、その堂宇を修築した記録となります。円空が当時、焼山と呼ばれていた恐山を訪れたのは、寛文5年と推定されるので、まだ同山が霊場として整備されていく途上だったと考えられます。

円空の下北半島での活動は、熊谷源無『万人堂縁起』（寛文8〈1668〉年）や、寺島良安『和漢三才図絵』（正徳2〈1712〉年）、菅江真澄の『牧の冬枯れ』（寛政4〈1792〉年）などで知られます。しかし、それらには現在、恐山菩提寺に祀られる十一面観音立像と観音半跏像のことは記されておらず、謎に包まれていました。

青森県佐井村長福寺の円空作十一面観音立像

今回、文献調査を進めたところ、2021年に出された佐藤良宜・小山隆秀両氏による論文『恐山史料の再発見』（『青森県立郷土館研究紀要』第46号）に、約60年間行方不明になっていた恐山関係文書のひとつである、『恐山境内案内演説』（寛政10〈1798〉年）という、境内を案内する口上書を見出しました。同文献によると、本尊を祀る地蔵堂において、「本尊慈覚円仁大師の御作」の地蔵菩薩、「恵心僧都の御作」の随身仏を紹介した後、「此仏ハ円空上人の御作十一面観音菩薩也、別円空の御作ハ近ハ松前臼ヶ岳の本尊、津軽ハ三馬屋の御観音御兄弟（中略）これなるハ同しく円空の御作寿命観世音」と案内されていたことが分かります。つまり、円空が訪れた130年余りのちの寛政年間、恐山では慈覚大師円仁や恵心僧都源信と並んで、円空の名が喧伝されていたことが分かります。

円空来訪の数年後に記された『万人堂縁起』では、円空のことを単に「国邑足跡の沙門円空」としていますし、前述のとおり当時焼山と呼ばれていた恐山は、まだ霊場として整備される途上でした。このことからうかがわれるのは、円空が有名な霊場の恐山に行ったのではなく、国内廻船の隆盛とともに、恐山が全国から信者を集める霊場へと発展していく過程に、円空が造像を介して一役買ったというのが実情に近いということです。

弘前城下から円空を退去させた人物

このようなめざましい活動を行なった円空が、なぜ弘前藩側では「御国ニ指置申間敷由被仰出候」とされ、厳寒期の弘前城下を追われたのでしょう。

このくだりのポイントは「被仰出（おおせいだされ：お命じになられ）」と敬語が使われていることで、『弘前藩庁日記』では、藩主津軽信政および他藩の藩主クラスにしか敬語は使われていません。つまり、領内に差し置くわけにはいかないと命じたのは、藩主信政当人だった可能性が高いのです。

当時、恐山のある下北半島は南部氏の統治する盛岡藩領で、津軽藩は盛岡藩から独立した経緯から、両藩の関係は良好ではありませんでした。さらに先々代の弘前藩二代藩主・津軽信枚はキリシタン大名でもありました。すなわち、宗門改めの行なわれていた時期、盛岡藩領を往来するなど不穏な動きをしている円空が弘前城下にいることを藩主信政が良しとせず、松前藩の御用ならば湊町青森へ、と退去を命じた可能性が高いのです。

一方、松前藩からの帰還時には、当時の松前藩の参勤交代ルートであった松前街道および羽州街道沿いに、蝦夷で造顕した像に続く様式の観音や如来の坐像を残し、「シーハイルの歌」でも知られる霊山梵珠山（ぼんじゅ）（468m）にも立ち寄り、山上に釈迦如来坐像を残しています。おそらく円空の蝦夷での活躍は弘前藩内でも知られるところとなり、円空は造像の要請に応えながら支障なく碇ヶ関を越え、現在の秋田県に当たる久保田藩へ向かったのでしょう。秋田県に15体、そして、宮城県松島・瑞巌寺にも円空の像が確認されています。

創立120周年記念事業
グレート・ヒマラヤ・トラバース／ステージV〈下〉

ネパールのG・H・Tも最終局面
シミコットから西端のヒルサへ

吉井　修

ドルポ、ムグ地方を歩いて歩行32日目、車道が通じているガムガディに着いた。翌5月24日は、ナショナル・パークであるララ湖をローカル・バスで往復。少々観光モードで楽しみ、ガムガディに戻った14時以降は休養する。5月4日以来でやっとWi-Fiが通じたので事務局に経過報告。夕食では、久しぶりに肉（鶏肉炒め）をたっぷり食べて英気を養った。ここでローカル・ポーター17名は解雇、この先はガイド・コックを含むカトマンズ・スタッフ7名とカッツァルと馬、合計10頭の編成で進むことになった。

ガムガディからシミコットへ

5月24日（晴）ガムガディ（2095m）～車でララ湖（2848m）を往復

5月25日（曇のち晴）ガムガディ～ナファ（2704m）

5月26日（曇）ナファ～チャンケリ・ラグナ（3594m）～サースサプレ（3122m）

5月27日（晴）サースサプレ～ピプラン（1700m）の上流2kmの河原

5月28日（晴）ピプラン～アプシア・レク（3195m）

5月29日（晴）アプシア・レク（レスト）

5月30日（曇）アプシア・レク～プンカ・コーラ（3010m）

5月31日（晴）プンカ・コーラ～マルゴー・レク・バンジャン（4037m）～リバー・キャンプ（3015m）

6月1日（晴）リバー・キャンプ～カープナスからジープを使用して～シミコット（2985m）

この8泊9日の行程は、村々とカルカを回っていく。ここまで歩いて来たドルポ地方より平均的に標高も低い。これという高い峠もない。1週間ほど歩けば、また大きな町であるシミコットに出るということで、比較的組しやすいのでは、という気持ちがあった。

ところがどっこい、1日の距離は長く、登り下りは相当なものがある。また、標高が下がったことで一転、暑さに苦しむ場面も出てきた。特に1700mのピプランから3195mのアプシア・レクまで登った5月28日は、午後から2805mの峠を越えてのアップダウンもあり、体にこたえる1日であった。よって翌日を休養日にすることになった。

また、5月31日も1000m登って1000m下る行程で、マルゴー・レク・バンジャンの登りではブルーポピー（亜種とのことである）の青い花に喜んだものの、バンジャン（峠）からの下りは急峻で閉口、これも骨の折れる1日であった。踏査開始から1ヶ月以上が経って、疲れも出てきたのだろう。

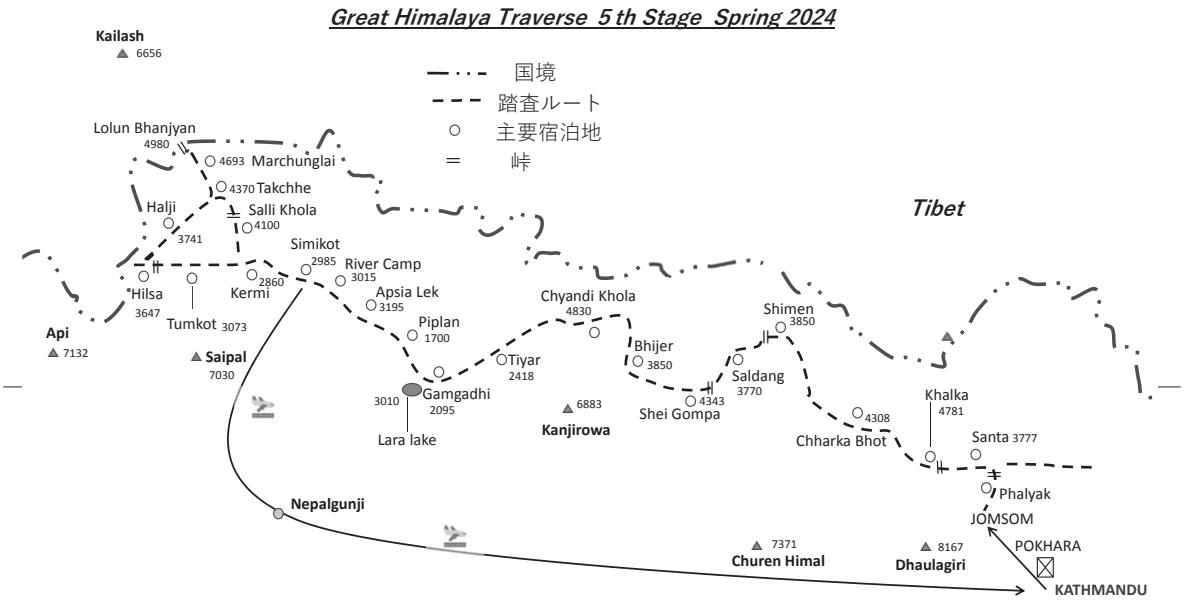
シミコットに着く前後から轟↓飯田↓吉井↓重廣の順にそろって皆、下痢になり、最後に発症された重廣隊長は症状がヒルサまで続いた。しかし、道中では川魚を買って夕食の一品に加えたり、ポーターがワラビを採ってピリ辛料理にしてくれたり、村の売店でコーラを買っては談笑しながら飲んだり、村々を回る旅ならではの光景を楽しむことができた。

6月5日にも放牧地に向かうたくさんの山羊の群れと遭遇

シミコットから中国国境を目指して北上

6月2日（曇）シミコット（レスト）

シミコットは飛行場もある街だ。この先はケルミの西のサリ・コーラの入り口からいったんG・H・Tルートを離れ、中国国境を目指して北上、聖山カイラスの望見を目指す。その後、南西に歩いて反時計回りにG・H・Tルートの最西端の町ヒルサに出て、ヒルサからシミコットはG・H・Tルート



を西から東へ戻ってくる。最終的にシミコットからカトマンズに帰る計画である。

この日、ガイドを除くカトマンズ・ポーターとカッツァル隊は休養日なしで出発。私たちは2日間の行程を翌日ジープで追いつく段取りとし、1日休養を取った。ガムガディ～シミコット間ではWi-Fi通信ができなかった。ここでも通信状況は悪かったが、休養日の大半を事務局や家族への交信に使うとともに、下痢の療養に努めた。荷駄を運ぶカッツァルと馬はシミコットから1頭減ったが、荷駄以外に隊員1名が馬に乗れる態勢を取った。後の行程は轟隊員は1日を、重廣隊長は大半を馬で進んだ。

6月3日(晴)シミコット～ジープでケルミ(2860m)

シミコット～ヒルサ間の車道ができたのは8年前だが、車が通ったのは3年前からと言う。歩くと2日間の行程をジープで3時間走って荷駄隊に追いついたが、途中、トラクターやジープをブルドーザーが後ろから押して、ようやく急坂を通過する場面もあった。

6月4日(晴)ケルミ～サリ・コーラ入り口(2987m)

朝、放牧に向かうものすごい頭数の山羊がテントサイトの前を通過する。この日は水場の関係でG・H・Tルートを西へ2時間半も歩かぬうちに、サリ・コーラ入り口のロッジの前に宿営することになった。ここは中国国境へ北上する道とシミコット～ヒルサ間の東西の道の交差点であり、何台かのバイクやジープの通過があった。ロッジに泊まっていた夫婦から、ハリジェまで車道が通じているとの情報を得た。

6月5日(晴のち曇)サリ・コーラ入り口～サリ・コーラ・カルカ(4224m)

6月6日(曇のち晴)サリ・コーラ・カルカ～ニャル・ラ(5001m)～ディミチュー(4489m)

6月7日(快晴)ディミチュー～タクチェ・コーラ(4362m)

この3日間の行程に村はなく、カルカや小屋のような家が数軒ある所が2ヶ所あるだけだった。静かで、かつ美しい景色の中の山旅

ナムナニをバックに記念写真に収まる踏査隊一行

で、出会ったのは放牧の行き帰りの山羊や交易のヤクくらい。6月6日に最後の5000m、ニャル・ラを越えた。

6月8日(晴)タクチェ・コーラ～マルチュングライ(4693m)

タクチェ・コーラから中国国境へも車道ができているが、ショートカットの旧道を登り、台地の上へ上がった。周りは広大な高原となり、遠くに山並みが見える。いかにもチベット高原という景色になった。サキャ・コーラを渡る橋まで進みたかったが、牧草の関係でその手前でテント泊となった。

フムラ・カルナリ川の大峡谷。向こうが下流になる

6月9日(晴)マルチュングライ～馬とカッツァルでロルン・ラ(4933m)を往復

中国国境まで往復30km近くあるということで、隊員はカッツァルで往復することになった。正確には重廣隊長と私は馬、飯田、轟隊員はカッツァルに乗った。カトマンズ・ポーターは居残りでもよいのだが、彼らも行きたがり、留守番に2人を残して中国国境を目指すことになった。彼らは早足の徒歩である。

3時40分に出発、サキャ・コーラとギャウ・コーラの橋を渡る。途中、キャン(野生の馬)やブルーシープの群れを見る。野生の動物の群れはとても美しい。6時50分、ロルン・ラ着。彼方のカイラスの姿を探すが見えない。チベット国境まで歩き、カイラスの現われるのを待つ。ここを訪れたことのある馬方が、前方下方に見えるのがマナサロワール湖でその上にカイラスが見えると言うが、あれが輪郭かもという程度で、見えたとは言い難い。それでも我が馬方やカトマンズ・ポーターが、カイラスの方向に向かって体を地に伏せて拝礼を繰り返し始めたのには驚いた。さすが聖山である。

カイラスは見えなかったが、ナムナニ峰(グルラ・マンダータ、7694m)は見えたので、全員そろって記念撮影をした。中国国境には中国側の「是より中国領土、即戻れ」という標識が立ち、少し先には国境監視所も設けられているが、ネパール側には何もない。対照的なことだと思った。マルチュングライに戻ったのは11時50分だった。

フムラの村々を歩いてG・H・T西端のヒルサへ

6月10日(快晴)マルチュングライ～トーリン(4152m)

6月11日(晴)トーリン～ハリジェ(3741m)

6月12日(快晴)ハリジェ～ティル(3944m)

6月13日(晴)ティル～マネペメ(3950m)

6月14日(晴)マネペメ～ヒルサ(3647m)

6月15日(晴)ヒルサ～チョーラグナ(4107m)～ナラ・ラ(4560m)～シミコット

中国国境を往復して後はタクチェ・コーラに戻り、そこから西へトーリン、ハリジェ、ティル村とたどってヒルサに達した。トーリンは家屋数軒、ハリジェ、ティルは古くからある石積みのそれなりの村であるが、途中にあったジャン(3990m)も含め、過疎化が進んでいる。

行程の終盤、特に6月13日は、南にフムラ・カルナリ川の深谷を見下ろして山腹を縫う道であった。グレート・ヒマラヤの大隆起と谷のせめぎ合いで、今回の行程では一見してどちらが上流か下流か分からなくなるような場所に何度も出会ってきたが、このカルナリ川も相当に深い。彼方の下流が上流のように見えた。

マネペメの手前からは車道となり、最後、中国国境近くになって九十九折りの道を延々と下り、ヒルサにゴールした。ヒルサからシミコット間は徒歩で6日間の行程であるが、砂塵が凄まじい道でもあり、ジープで戻ることになった。最後はジープになったが、6月15日にシミコットに着いて、踏査を完了した。

今回の行程は踏査日数55日と、今までで一番長かった。「今もな

おなせと囁く声ありて 辿りゆくなり 遠きこの道」。1958年、西北ネパール学術探検隊の川喜田二郎隊長の一首と記憶している。私はこの一首を胸に、自分自身を励ました。たくさんの支援や応援をいただいて、歩き切れたことがうれしい。

温故知新の山旅G・H・T ネパール・エリアの踏査を終えて

重廣恒夫

前途多難な旅立ちであった。2019年9月12日、中国・武漢市において初の新型コロナウイルスの感染が確認されたが、ネパール国内でも1月14日に感染者が出て、日本からの入国者に対してネパール入国時のスクリーニングを強化する、と発表された。第1回のカンチェンジュンガ・エリア踏査の準備を進めていたが、予定を前倒しして2月29日に日本を発ち、同日カトマンズに到着した。

3月13日、ネパール政府が外国人に対するアライバル・ビザの発行を停止、20年プレ・モンスーンの登山、トレッキングの受け入れを中止した。また、政府はこの年を「ネパール観光年」として準備を進めていたが、3月23日、ネパール全域のロックダウンが決定(我々は3月7日にタプレジュンを出発、カンチェンジュンガに向かっていた)され、観光年のイベントも即座に中止された。そんななか、3月24日にグンサでNHKのグレート・ヒマラヤ・トレイル撮影隊と逢った。旧知の連中との邂逅に話が弾んだが、今年8月初旬、K2西壁でクルーのひとり、中島健郎が逝ってしまった。〝温故知新の山旅〟の悲しい思い出となってしまったのが残念でならない。

G・H・Tのネパール国内については、

◆ステージⅠ　2020年プレ・モンスーン：カンチェンジュンガ南北BC～パブクカン（6244m）登山

◆ステージⅡ　20年ポスト・モンスーン：オランチュンゴーラ～ティプタ・ラ往復～ルンバサンバ山群～マカルー山群

◆ステージⅢ　21年プレ・モンスーン：クーンブ山群～ロールワリン山群～ジュガール山群～ランタン山群

◆ステージⅣ　21年ポスト・モンスーン：ガネッシュ山群～マナスル山群～アンナプルナ山群

◆ステージⅤ　22年プレ・モンスーン：カンジロバ山群

◆ステージⅥ　22年ポスト・モンスーン：アピ・サイパル山群

そして、23年プレ・モンスーン～ポスト・モンスーン、24年ポスト・モンスーン：インド国内／25年プレ・モンスーン～ポスト・モンスーン：パキスタン国内を予定していたが、コロナ禍によって1年半の中断を余儀なくされ、以下のような結果になってしまった。また、踏査の目的の一つに掲げていた未踏峰登山が1山しかできなかったのは残念である。

◆ステージⅠ　20年2月29日～5月16日：カンチェンジュンガ・エリア

◆ステージⅡ　22年10月1日～11月26日：マカルー・エリア(3コルの通過)

◆ステージⅢ　23年4月1日～5月31日：クーンブ、ロールワリン、ランタン・エリア

◆ステージⅣ　23年10月7日～11月25日：ガネッシュ、マナスル、アンナプルナ・エリア

◆ステージⅤ　24年4月15日～6月26日：アッパードルポ、ムグ、フムラ・エリア

コロナ禍で激減していたトレッカーも、22年以降、欧米の人たちを中心にして戻りつつある。なかでもエベレスト街道は往時を凌ぐ盛況ぶりである。また、最近はアジアの人たちも多くなっていると感じるが、日本人の姿はまだ少ない。コロナ禍と昨今の円安によって早急の回復は難しいのかもしれないが、雄大な自然と対峙するヒマラヤに、一日も早く戻ってもらいたいものである。

5回の踏査を支えてくれたカトマンズ・スタッフたちとのお別れの会

REPORT

第８回「山の日」全国大会が東京・八王子市で開催される

萩原浩司

８月11日は国民の祝日「山の日」。「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」という制定趣旨を多くの人々に伝え広めるために、各都道府県持ち回りで開催されている「山の日」全国大会が東京都で開催された。都内各地で関連イベントが開かれるなか、８月11日には八王子市のＪ：ＣＯＭホール八王子で記念式典が開かれ、１５００人の来場者が集まった。

第１回大会以来の出席となった全国山の日協議会会長・谷垣禎一氏の挨拶

オープニング・アトラクションとして八王子実践高等学校書道部が登壇、書道によるパフォーマンスが演じられ、続くメイン・アトラクションは、古澤美樹プロデュースのダンスチーム「symbiose」による創作ダンス、東京楽竹団による竹を使った楽器による自然音楽演奏、そして、ブレイキンのダンス・パフォーマンスをBrilliant Me Dance Studio が披露。これらのパフォーマンスを講談師・神田山緑が、山とともに生きてきた人々の生活や文化の移り変わりのストーリーとして語りつないだ。テーマは「未来に向けて見つめ直す、山への敬意と感謝」。

続いてのプログラムはデジタルコンテンツ。「いきものイロイロＴＯＫＹＯ」として、東京に生息する「いろいろな動物たち」を会場正面の大スクリーンに投影し、参加者各自がスマートフォンのアプリを使って色を染めていくというデジタル塗り絵で、山や海に棲む動植物たちを紹介しながら生物多様性を学ぶという趣向だった。

明星学苑吹奏楽団による音楽演奏ののち、式典の部に入る。

第１回大会より恒例となった、山への親しみや感謝の思いを込めて鐘を打ち鳴らす山鐘（８点鐘）が、ボーイスカウト東京連盟らの隊員たちによって行なわれ、超党派「山の日」議員連盟の衛藤征士郎会長が開会宣言。今大会のテーマである「山とともに成長する都市、東京―山々の恵みを未来へつなぐ―」を発表し、この大会を機に山の日の制定趣旨を皆で共有しようと呼び掛けた。国歌斉唱後、主催者挨拶として東京都副知事の栗岡祥一氏が小池百合子・東京都知事のメッセージを代読。１００年先の未来を見据えた新たな緑のプロジェクト「東京グリーンビズ」を推進し、緑を守る、育てる、生かす試みについての説明があった。

続いての登壇者は本大会実行委員会名誉顧問で、全国山の日協議会会長の谷垣禎一氏。第１回の上高地での全国大会以来、ようやく出席することができた喜びの気持ちを伝えたのち、メトロポリタン東京の地で、性別・国籍・人種・年齢・世代・貧富や障がいのあるなしにかかわらず、誰もが山と自然に親しむことができる権利を持っていることを世界に向けて発信するとともに、未来の人々へと引き継がれることを期待する、と述べられた。

「山の日帽」が福井県の杉本達治知事へと手渡された

来賓の挨拶としては、環境大臣政務官の朝日健太郎氏が国立公園満喫プロジェクトについて、林野庁長官の青山豊久氏が森林資源の循環利用などに触れながら、貴重な自然を次世代に伝えていこう、と語られた。

続くトーク・セッションでは俳優の釈由美子さんと登山家の野口健さん、そして、栗岡東京都副知事が登壇され、東京都の山の魅力

や子どもたちの自然体験の大切さについて語り合った。

次いで山の日の歌の合唱と演奏が明星小学校、明星学苑吹奏楽団によってなされた後にリレー・セレモニー。大会のシンボルと言える「山の日帽」が、栗岡東京都副知事から次回開催地である福井県の杉本達治知事へと手渡された。

セレモニーを締める山鐘（11点鐘）が打ち鳴らされた後に、本大会実行委員会副会長の橋本岳氏が閉会の挨拶を述べ、記念式典を締めくくった。

2時間の中に17ものプログラムを分単位で組み込んだ贅沢な構成だったが、17分という短時間のトーク・セッションのとりまとめを含め、総合司会のフリーアナウンサー・川田裕美さん（実は大の山好き！）の見事な進行が光った記念式典であった。

東京多摩支部の「山の日」キャンペーン
奥多摩駅前で安全登山チラシを配布

東京多摩支部では、祝日「山の日」が制定された2016年以来、毎年8月11日には奥多摩山域の玄関口、JR奥多摩駅前広場で山の日周知と安全登山を呼び掛けるチラシの配布キャンペーンを実施している。また、奥多摩駅近くにある支部の集会施設「奥多摩BC（ベースキャンプ）」で、地元の奥多摩町民などにも「山の日」を知ってもらいたいという思いでBCの飾り付けを行ない、チラシ配布などの活動を実施している。

今年は「山の日」全国大会が東京・八王子市で開催されることから、本部の「山の日」事業委員会（久保田賢次委員長）より当支部のチラシ配布などの活動を「山の日」全国大会協賛イベントとして実施してほしい、との要請があった。そこで同委員会の協力を得て、例年に増しての態勢で「山の日」キャンペーンを実施した。

「山の日」前日の10日㈯は奥多摩町の夏祭りで、打ち上げ花火などがあり、奥多摩BCに多くの支部員が集まったので、この機会に本部委員会の成川隆顕さんから「山の日」制定までの話をしていただいた。祝日制定には日本山岳会が深く関わっていたとの説明があり、多くの会員が「山の日」にさらなる愛着を感じたことと思う。

8月11日は早朝6時半、駅前広場でチラシ配布活動を開始した。広場には「山の日」の横断幕を飾り、のぼり旗を立ててにぎやかに演出し、チラシ配布要員も支部の安全対策委員、奥多摩BC運営委員、本部の久保田さんら「山の日」事業委員、奥多摩BC宿泊の一般会員も加わり13人で活動した。また、例年と同様に青梅警察署山岳救助隊11人と奥多摩ビジターセンター職員も参加、さらに山梨県警の4人とケーブル・テレビの撮影班も加わってキャンペーンは大変なにぎわいとなった。

チラシの配布は、まず駅前のバス停に並ぶ登山者に対して開始した。今回のチラシはA4判3つ折りのカラー版にアミノバイタル包（スポンサー提供品）を添付したので、皆さん喜んで受け取ってくれた。当日は青空が広がる晴天で、奥多摩駅には電車が到着するたびに多くの登山者やキャンパー、観光客が下車してくる。チラシの配布は気が抜けない大忙しさとなる。「今日は『山の日』です」と声掛けしながら配布し、登山者には山岳救助隊と連携して「登山届を提出してください」と安全登山実施の呼び掛けも行なった。

チラシの配布活動をして思うこと――。「山の自然を大切にしましょうね」と子どもに説明する家族連れのハイカーがいる一方で、「えっ、今日は『山の日』なの？」という若者が多くいたこと。キャンペーン実施の必要性を強く感じた。

今回配布したチラシは奥多摩駅前広場が約800枚、ビジターセンターや奥多摩BCなどが約200枚。例年の倍以上で、大盛況のキャンペーンだった。

（東京多摩支部　石井秀典）

奥多摩駅前で東京多摩支部員らによりチラシ配布を実施

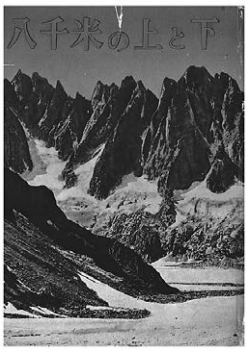
連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

㉕『八千米の上と下』

（H・ブール著、朋文堂）

松田宏也



昭和30（1955）年初版発行

１９５３年７月、多くの悲劇を生んだ〝魔の山〟ナンガ・パルバット（８１２６ｍ）の頂に、男がたった独りで立った。オーストリア出身の若き登山家、ヘルマン・ブールである。「下山せよ」との隊長命令を拒んで最終キャンプから単独で頂を目指し、驚異的な体力で標高差１２００ｍを登り無酸素での登頂を果たしたのだ。帰路、８０００ｍ付近でのビバークを余儀なくされたが、這う這うの体で奇跡的に生還を果たす。

下山時に撮られた、疲れ果て渇き切った表情の顔写真とともに〝魔の山〟を征服したブールは一躍、世界中にその名を知られることになった。そして55年、横川文雄の翻訳で日本の岳人に多大な影響を与えた『八千米の上と下』が発刊された。

同志社大学の山岳サークルで岩と雪山の基本をたたき込まれ、４回生のときにアラスカ遠征を経験した後に、私は千葉で社会人生活を始めることになった。アラスカで芽生えた高峰への好奇心を満たそうと社会人山岳会に入会、ここから私の新たな「山」が始まった。

「いつかはヒマラヤへ」の夢を胸に毎週のように谷川岳へ通い始めたころ、古本屋で手に取ったのが『八千米の上と下』だった。ヒマラヤの話かと思ったが、そこには、ブールの少年時代からの岩登りに対する行動と考え方が多くの登攀実績とともに記され、山へのやむにやまれぬ衝動が綴られていた。

自転車で国境を越え、パンとチーズをかじりながら質素な装備で岩から岩を次々と登っていく。そして、冬期登攀にのめり込んでいった熱い情熱はいったいどこから生まれ、何がそこまで駆り立てたのだろう。仕事と山の両立の難しさにへこたれそうな自分に比べ、困難な山を真摯に追求していくブールの姿は、憧れのアルピニストとして眩しく輝いていた。

ナンガ・パルバットで足の指２本を失ったものの、再起を懸けてさらなる挑戦が続く。57年、ブロード・ピーク（８０５１ｍ）では、高所ポーターを使わず隊員４名で荷揚げを行ない、無酸素での初登頂を果たした。「人間はより高い目標を目指すことによって大きくなる」との言葉どおり、ブールはヒマラヤに自分たちだけの力で立ち向かい、少人数、無酸素という画期的なスタイルを実践して見せた。〝魔の山〟ナンガ・パルバットの単独初登頂に加え、ブロード・ピークでの記録は歴史に残るものであるが、それ以上に、後に続くクライマーへ道筋を指し示した意義は余りにも大きかった。それは、ラインホルト・メスナーを筆頭に８０００ｍ峰へのアルパイン・スタイルでの挑戦という大きな潮流となった。

が、ブロード・ピーク後に息つく暇もなく向かったチョゴリザ（７６６５ｍ）で、ブールは吹雪のなか雪庇を踏み抜き、帰らぬ人となった。オーストリアの英雄は、８０００ｍ峰２座初登頂の栄光に包まれたままチョゴリザに消えた。もしも、もしも無事に生還していたなら、果たして次はどの山を目指して我々を驚かせてくれたのだろうか。新たな「八千米の上と下」の世界でブールは何を感じ、何を伝えてくれたのだろうか……。

今回、本書を四十数年ぶりに再読した。「人生がいかに美しいものであり、どんなに素晴らしいものであるかを知るために、一度は奈落の底まで突き進まねばならない」――ミニヤ・コンカで遭難した私に向けられた人生訓なのであろうか。「お前は山に心を奪われたのだ。それなら、山に立ち向かうだけの力を養わなきゃならない。どんな状況にも対応できるだけのことを、覚えなきゃならない」

九死に一生を得、その後も山に登る私を心配して、ブールが語り掛けているようだ。

（図書委員会担当理事）

㉖『山の繪本』（尾崎喜八著、朋文堂）

近藤雅幸

私が中学2年のころだったろうか。神田の書店街をぶらぶらと歩いていて、たまたまどこかの店に入って、何気なく棚を見ていたら尾崎喜八詩文集4の『山の絵本』があった。全集の中の一冊だからさほど目立っているはずはないが、なぜか気になって手に取ってページをめくってみた。

本の冒頭は「たてしなの歌」。どんな山の本とも違うその書き出しは、散文詩のようでありながら、その上を輻射谷、開析平野、河成段丘などという自然地理学の言葉が舞い、それが、七度の音が入った和音のように、妙に印象に残った。そして、読み進めていくうちに思わず詩人尾崎喜八の世界に引き込まれていく私がいた。

山を始めてさほど経っていないときだったので、山が楽しくて楽しくて仕方がなかった。月に2～3回の山行は、私が望むものの全てだったが、手に取った『山の絵本』は、まるでそれが前もって用意されていたもののように、そのことごとくが自然につながってしまったのだ。

昭和10（1935）年初版発行

尾崎の作品は、その少し前から気にはなっていた。どんな経緯で入手したのかはすっかり忘れてしまったが、ある詩人が選んだ、現代詩人の詩を集めた詩集を手元に置いて眺めていたことがあった。その中で、どちらかというと分かりにくく、すんなりと胸に落ちてこないように思える大多数の詩の中で、尾崎の平易でいて胸にストンと落ちてくる詩が妙に心に残ったことがあった。おそらく、そんなことも潜在意識の中にあったのかもしれない。

買い求めた『山の絵本』は想像以上に私の心に深く沁み込んでいった。詩人による、まるで散文詩のような紀行。ほかの誰もが表現できないような山のすばらしさを、もっとふさわしい言葉で紡ぐことで、目の前にその光景や感傷がごく自然に浮かび上がってくる。

そんな紀行文だから、そのうちに『山の絵本』に描かれた場所をたどってみたくなるのは、自然の成り行きである。

その後、冒頭の「たてしなの歌」をはじめ「念場ガ原・野辺山ノ原」「花崗岩の国のイマージュ」「神津牧場の組曲」などなど、今から思い返すと『山の絵本』に出てきた場所は、ほとんど全て私がたどって来た道になっていた。

しかし、50年以上の歳月は残酷である。蓼科牧場はいまやスキー場に姿を変え、念場ヶ原は別荘が建ち並び、車が排気ガスをまき散らして『山の絵本』の時代の残滓はもうほとんど見ることができない。多くの場合は失われたものに想いを馳せながら、やるせない気持ちでそんな場所を歩かざるを得ないのだ。

ただ、そんな中でも歩いていてふと、樹のそよぎや、森を活気づける鳥の声、澄んだ空に浮かぶ雲の姿に、『山の絵本』の文に描かれた情景を見つけて心が洗われるような気がすることもよくある。

『山の絵本』の世界は、時代を超えて山を歩く人の心にほっとした安らぎをもたらしてくれるのだ。

詩人尾崎喜八は河田槙（みき）をはじめとする「霧の旅会」で山の魅力を知り、武田久吉博士や辻村太郎博士から自然科学を教わった。『山の絵本』は、それによって花開いた尾崎の山と自然への愛の賛歌である。いま山を登る私たちは、果たしてどれほど素直に山の魅力を感じ取り、山を愛することができているのだろうか？　手垢だらけの尾崎喜八詩文集4『山の絵本』を手に取るにつれ、その問いに対して答えられる自信がなくなっていく。

『山の絵本』以降も晩年まで一貫して尾崎は山を愛し続け、数多くの山の名文を残した。そういった作品の主なものは、今年上梓されたアンソロジー『私の心の山』（ヤマケイ文庫クラシックス、税込み2310円）に所収されている。

なお、尾崎の山と関係のない作品も含めると、ほぼ全作品が掲載されているサイトがあるから、それを見ることをお勧めしたい。サイト名は「詩人尾崎喜八」URLはhttp://www.ozaki.mann1952.com/

（図書委員会委員）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

記念事業委員会――

コーカサスの桜プロジェクト　植樹祭に参加するジョージア旅行の説明会を開催

創立120周年記念事業「コーカサスの桜プロジェクト」は、ジョージア国のコーカサス山麓の町、メスティアにおいて日本の桜の植樹を行なう準備を進めている。植樹祭の日は2025年5月29日に決定したので、5月末に植樹祭に参加する2つの旅行ツアーを企画している。

「①あまり歩かない観光ツアー9日間」および「②山麓を歩くトレキングツアー12日間」の2コースだ。いずれも世界遺産の町メスティアにおいて植樹祭に参加し、コーカサス山脈の5000m級の秀峰を見て、氷河の懐の高山植物のお花畑を歩く。

旅行の説明会は、24年10月19日㈯午後2時から、日本山岳会104号室で開催するので、ふるってお越しいただきたい（予約は不要）。また、旅行に興味はあるが説明会に参加できない方には、説明会開催後に資料を差し上げるので、以下のメールアドレス、または日本山岳会「コーカサスの桜プロジェクト」までハガキで請求を。

✉sakuracaucasus@gmail.com

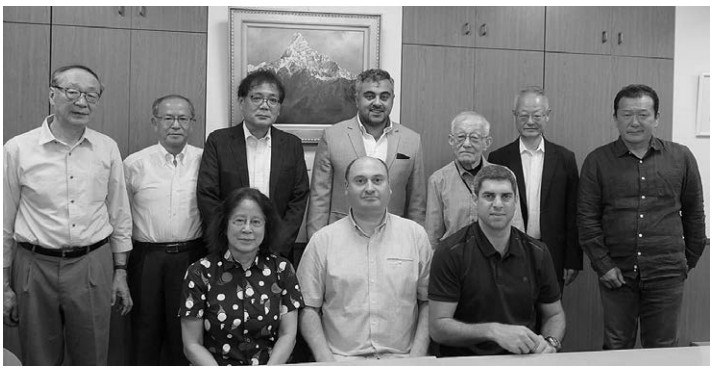
コーカサスの桜プロジェクト＝吉川正幸宛て。

ジョージア国リゾート開発庁長官と駐日大使が日本山岳会を訪問

ジョージアのオノプリシヴィリ・リゾート開発庁長官とレジャバ駐日大使が、24年7月13日に日本山岳会を訪問された。オノプリシヴィリ氏は登山家で、ジョージア登山者連盟の幹部でもある。

また、レジャバ大使には2月29日に、当プロジェクトが開催した講演会の講師を務めていただいた。日本山岳会では橋本会長、古野前会長、およびコーカサスの桜プロジェクトの幹事が応対した。長官および大使からは、来年5月のメスティア市における桜の植樹祭をサポートする、とのお言葉をいただいている。

（吉川正幸）



前列左から橋本会長、リゾート開発庁長官、ジョージア大使

「会員優待サービス」変更のお知らせ　〈会員サービスWG〉

＊【那須・奥鬼怒・日光・尾瀬】山の鼻小屋／宿泊料金の500円引き→1万円以上の宿泊料金に対して500円引きに変更（必ず電話で予約を。インターネットでの予約は割引なし）

上高地クラブ――

上高地クラブが団体会員として承認される

■上高地での「歩く講座」体験

2年前より活動を始めていた上高地クラブが、このたび団体会員として承認された（会員番号1729９）。JACのメンバーとして相応しい会となるよう努めますので、よろしくご声援ください。

今回、入会承認後初めて4泊の日程で上高地入りした（案内絵ハガキ2000枚使用）。山研をいか

Climbing&Medicine・91

山でのマムシ咬傷を防ぐ

医療委員会　秦 和寿

シマヘビに巻かれたマムシ。マムシは完全にシマヘビに包み込まれている

頭部をシマヘビに咬まれて斃死したマムシ

有毒のマムシと無毒のシマヘビが闘ったらどちらが勝つと思うだろうか。この２種の争いを東京八王子の雑木林で見たことがある。マムシが断然強いと思っていたのだが、マムシは胴体を巻かれ締め付けられ、シマヘビの完勝だった。多くの場合、闘争心の強いシマヘビが勝つ。私たちは自然界のことを十分把握できていない。ヘビを見て種類を識別できない人も多いと思う。

マムシの頭は三角と言われるのだが、ヘビの頭は皆三角様で、比較して初めて分かるものだ。山野を歩くとマムシに遭遇することがある。草叢の中にマムシを見つけたらどうすれば良いだろうか。静かに逃げることだ。ところが、ヤブで気付かずにマムシを踏んだり、沢登りで詰めた岩にいたとかで避けられない場合もある。登山靴や厚手の靴下は有効だ。夜間などは素足を避ける。

マムシに関して生態的な情報を持っていればあわてないですむと思う。

《マムシの概要》

分布　マムシGloydius blomhoffiiは北海道、本州、四国、九州に広く分布。草叢などに常在し、岩の上で日光浴していることもある。

形状　体色は茶褐色で体長40～60㎝、胴が太く表面に銭形斑がある。

毒性　毒成分は酵素、蛋白質からなり、出血毒である。近年のマムシ咬傷は年に300～500人程度と言われ、数名が死亡する。地域により毒性の差異があるかもしれない。手足を咬まれることが多く、腎臓障害などを来し長期間苦しむ。

マムシによる人体被害　一般的には山林農作業の従事者が多いが、食用にする習慣もあり、捕獲時に咬まれることもある。咬傷は偶然起きるが、連続して咬まれないように逃げる。毒量は少ないほど良い。

咬傷と応急処置　部位は痛み、激しく腫れる。咬まれた中学生が泣き叫ぶのを見たことがある。個人で行なえる応急処置はほぼなく、毒を吸引することも効果不明で、冷やすのもマムシ毒には効果がない。

治療　手足を安静に保ち、直ちに医療機関を受診する。治療は抗毒血清および破傷風血清などだが、早期の局所の腫脹や疼痛の改善は期待できず、毒量が多ければ咬まれた所は壊死する。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。
日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 http//jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html

■上高地研修会（８月17～19日）

これまで中部山岳国立公園の北部（立山・黒部地域）を中心に活動してきたが、今回初めて南部の玄関口である上高地でインタープリテーショ活動を経験した。中部山岳国立公園も来年で90歳を迎える。多くのビジターに自然環境のすばらしさと大切さを体験していただければ、と思っている。山へのアプローチは様々だが、体験して感じたことを、些細なことでも心に留めていただければ、と思って活動している。

（河合義則）

■自主研修会

８月17日～21日の間に、10名が に快適に利用し、上高地を訪れる人たちにより良い体験をしていただくにはいかにすればよいか、を試行錯誤をしたが、無事終了することができた。用意した食材（１５００円／人日）を会員が見事な料理にしてくれた昼の「歩く自然体験」は延べ12人、夜は２ヶ所のホテルでの講話参加者は延べ38人（会員を含む）だった。この体験を次回にも活かそうと思う。

（大森弘一郎）

山研へ集まった。自主研修会とはいつものように先生に教わるのではなく、昼の「歩く自然観察会」と、夜のホテル2ヶ所での「ミニトーク」、および山研での生活（豪華な？）の自主体験だ。会員だけで行なう散策は、それぞれのフィールド情報や知識を交換する良い機会である。

ミニトークの最後に河合義則さん（富山）は、アイリッシュ・ミュージックのスプーンズの演奏を、吉田春彦さん（栃木）は人生におけるチャレンジのお話をなさり、それぞれのパーソナリティがより引き立った。これが翌朝の観察会への参加予約につながったのではないかと思う。

夕食後、河合さんはスプーンズ、松川信子さん（東京）はオカリナを、山研管理人の山田さんのギター演奏も加わってすばらしい「演奏会の夕べ」となった。

参加者は各々、年齢や居住地、活動フィールド、自然への向かい方などの違いがあるが、ひとりひとりのネイチャー・フィーリングを大切にした新しい会が、成長していくのを楽しみにしている。

上高地に詳しい方も、これからの方も、次回参加されませんか？Webでぜひ「上高地クラブ」を検索してください。

（本村貴子）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

東九州支部

鳴子川遡行　研修山行報告

6月5日㈬、2024年度研修山行の第2回「沢登りを初級から学ぶ―鳴子川（玖珠川、筑後川源流）遡行」に参加した。吉部駐車場に8時30分集合。安東支部長から6月2日、神原本谷での沢登りの下山中、滑落事故の救助現場に遭遇してメンバー5人で救助を手伝ったとの話があった。どのように負傷者を登山道まで引き上げ、ヘリコプターまで運んだのかの説明を受けた。何よりも大切なことは「リーダーシップとメンバーシップを認識すること」で、リーダーの指示の下、メンバーがいかにそれぞれの役割を果たすかが重要、と知らされた。

F1の取付付近

次いで本日の遡行図を手渡され、ルート説明を受けた。F1～F3まで行くが、遡行図にあるF2、F3が地形図にないのはなぜか、滝の記号と滝の定義（流水が急激に落下する場所。普通は高さ5m以上で常に流れている）の説明を受けた。

9時10分、参加者8人を3パーティに分けて出発（安東L〈リーダー〉・荒巻／上田L・佐藤〈裕〉・橋本／秋山L・佐藤〈彰〉・上野）。大船林道ゲート横から5分ほど進んだ所で沢の装備を着けて入谷。ゴーロを、パーティの実力に合わせて、各リーダーがどのルートを行くか見極めながら進む。沢登りの面白さは、それぞれが進みたいルートを選択できることだ。

10時46分、F1に到着。今日の核心部だ。滝の様子を調べ、登攀準備に入る。秋山Lが登るので下でビレイ、安東Lも登る。水音が大きく声が届かない中、「ビレイ解除」、「登れ」の合図でロープにつながり順に登る。途中、セットしたトライカムが外れないハプニングがあった。全員が登り、安東Lと秋山Lが器具を回収に行くが、外れず残置となってしまった。

次は滝の上の徒渉だ。安東Lから、滑ると滝下まで落ちるので慎重に、との注意がある。また、フィックスロープを張るので慎重に渡るように、との指示。我がパーティからセルフビレイ・コードをロープにセットして慎重に渡り、F2（暮雨の滝）を目指す。F2は右側を登る。12時40分、ここで昼

F1を登り、右岸から左岸へ移る

食。F2上のゴーロは左側に支谷が2本あって確認しながら進む。13時14分、F3に到着するが難度が高く登れず、ここで終了となる。装備を解き左岸の登山道まで登って下山。14時20分、駐車場に帰着。

反省点として、滝では水音により声が届かず、意思の疎通が欠けていた。事前にもっと打ち合わせをするべきだった。また、言われなくてもリーダーの考えを理解できるようにならなければいけないと思った。トライカムの回収ではミスして殘置せざるを得なかった。核心部でリーダーがどこを登ったのかをしっかり見極めることや、もたついて作業が遅いことを安東Lより指摘され、学ぶことの多い研修となった。

（上野展子）

10～11月開催の山岳祭のお知らせ

●第65回　木暮祭　木暮碑委員会主催（日本山岳会山梨支部は運営事務局）

日時　令和6年10月19日㈯～20日㈰

・前夜祭　19日　17時　場所＝みずがき山リーゼンヒュッテ

・魔子登山　20日　8時（右記ヒュッテに集合）～13時

・碑前祭　14時　場所＝金山平

奥秩父の山を登山の対象として世に広めた、木暮理太郎の遺徳を顕彰するために、増富ラジウム峡奥の金山で開催。氏の没後、山梨支部や霧の旅会、地元観光協会などがレリーフを造り、金峰山を見渡せる岩に埋め込み、有志が参拝していた。1959（昭和34）年に台風でレリーフが崩壊したため、復興のために木暮碑委員会（日本山岳会、同山梨支部など6者で構成）を立ち上げ、現木暮碑を再建した。この再建記念式典が第1回木暮祭となる（60年10月）。

今年は山行委員会で「GO　TO　山岳祭　木暮祭と魔子の山」を企画している（18ページ参照）。

・問合せは古屋まで

☎090－4539－3059、✉qqpk733v　9@feel.ocn.ne.jp

●第8回　槇有恒碑前祭　日本山岳会北九州支部主催

日時　令和6年10月27日㈰　10時～10時30分　場所＝風師山風頭にて碑前祭（8時にJR門司港駅前に集合）　下山後、12時～14時　食事会（5000円）

1956（昭和31）年に日本山岳会がマナスルに初登頂後、槇有恒隊長は登山の支援をいただいた毎日新聞西部本社（当時旧門司市）を表敬訪問し、風師山にも立ち寄られた。その折の感慨を述べた一文「この頂に立つ　幸福の輝きは　これをとらふる　術を知りし山人たちの　力によるものなり」が山頂の記念碑として残された。その後、槇さんの業績を知る者が少なくなり、森武昭元会長の助言を受け2016年に略歴碑を設置する。地元山岳会が槇有恒碑前祭として行なってきた山岳祭は、17年に日本山岳会北九州支部に引継ぎ要請があり、継続している。

・問合せは北九支部事務局　清家幸三まで

☎090－8664－4411　✉qqmn　2kd　9k@fuga.ocn.ne.jp

●第37回　宮崎ウェストン祭　高千穂町と日本山岳会宮崎支部の共催

日時　令和6年11月3日（日・文化の日）　開催時間＝未定（令和5年度は受付開始15時30分）

場所＝高千穂町五ヶ所高原三秀台ウェストン碑前広場。終了後、地元主催の交流会開催予定。翌日、祖母山山行予定（自由参加）

1890（明治23）年にウェストンが祖母山に登った記録が発端で、地元の北稜山岳会が山岳祭を始め、その後高千穂町と宮崎支部の共催で開催している。開催場所の三秀台からは祖母山が眺められ、ウェストン生家から贈られた石（ヨークシャー石）を嵌めた高さ7mの碑に鐘が付いている。情熱を込めたイベントを衰退させることなく盛り上げるべく、地域の方々も参加し、日本山岳会の九州5支部（福岡、北九州、熊本、東九州、宮崎）の交流と連携を保つ場になっている。

・問合せは宮崎支部長・日高まで

☎080－1766－1207　✉myz@jac.or.jp

図書紹介

シャモニーの谷に生まれて

クリスチャン・モリエ著／柴野邦彦訳

2024年2月
未知谷
四六判　272ページ
2700円＋税

著者のモリエは、モン・ブランの麓のシャモニ・ガイド組合に所属する高山ガイド。シャモニで生まれ育ち、ガイドになって行なった登山や救助などの諸活動の軌跡を綴った自伝的著作。

著者が生まれたのは1940年、まだシャモニがひなびた昔のたたずまいを残している時代だった。幼き日を過ごした村の生活を語る場面では牧歌的な物語を読むようで、山岳リゾートとして観光化した現在と比較すると、あまりの距離感の大きさに驚かされる。しかもその回想は、エギーユ・デュ・ミディなどのロープウェイ建設、モン・ブラン・トンネル開通に代表される開発事業が、深刻な環境問題をもたらすものだったことの証言になっている。

シャモニ・ガイド組合は、200年以上の歴史を持つ由緒あるガイド組織だが、その伝統は所属ガイドの誇りでもある。著者にとっても、それはシャモニ人特有の価値観とアイデンティティの基になるものだった。元来シャモニ生まれでないと加入できなかったが、今ではその規定は緩められている。しかし、シャモニ以外から来たガイドに対して、組合の歴史や伝統を尊重しない者もいて「彼等はその組織の規範や名誉のための決まりといったものに結びついていない」と批判的な見方をしている。

とは言いながらも、古いガイドから見ると著者たちは新しい世代の若者だった。ガイドの仕事のためだけでなく、個人的な楽しみでも登山をしていたからだ。「ほとんどの時間、我々はお客なしでアマチュアとして山に登っていた」というが、古いガイドには、経済的報酬をもらわない登山など考えられないことだった。モリエのような若いガイドたちは、都会のクライマーとも「山に対する考え方を共有するので、お互いに尊敬の絆を結んでいた」とも語っている。

このようなシャモニ人の生の声を聞くことはこれまであまりなかった。ガストン・レビュファとかフリゾン・ロッシュの作品で、プロガイドとしての生きがいやすばらしさについて書かれたりはしていたものの、彼らは外から来た人間だった。生粋のシャモニのガイドがこれほど率直に胸の内を明かすのは稀で、そのうえ裏話的な話題も披露されていて、それだけに興味深い読み物となっている。

ただ、原書と照らし合わせてみたら、全体の構成が組み替えられていることに気づいた。原書の方は「第1部　生い立ち」、「第2部　ガイドという職業へ」、「第3部　山　私の世界」の3部構成で、それぞれが8～9の章に分けられているが、訳書では、単に6つの章立てにする形に変更されている。各章の内容はほぼ原書に対応しているとしても、章の入れ替えがいくつかあり、省略された章もある。

原書の場合は、基本的に年齢を追って、ガイドとしての成熟の過程が順序よく読み取れるようになっていたのに対して、訳書はその順序を入れ替えたために叙述の焦点がぼやけてしまった。また、翻訳ミスと思われる箇所や、一般的ではない地名や人名表記が所々見られるのも残念だ。

（飯田年穂）

会務報告

■8月の理事会は夏休みのため休会でした

ルーム日誌 8月

1日　常務理事会　YOUTH CLUB委員会　山岳地理クラブ
2日　「山の日」事業委員会　入会説明会
5日　記念事業委員会（山岳古道調査）
6日　広報委員会
7日　東京多摩支部
13日　フォトクラブ
14日　休山会　かっぱの会
17日　アルピニズムクラブ
19日　総務委員会
20日　麗山会　沢登り同好会Ⅱ
21日　つくも会
26日　東京支部設立プロジェクト緑爽会
27日　アルパインスキークラブ
28日　記念事業委員会（グレート・ヒマラヤ・トラバース）子どもと登山委員会
29日　記念事業委員会（グレート・ヒマラヤ・トラバース）
30日　記念事業委員会
8月来室者　163名

会員異動

物故

古谷聖司（7510）24・7・21

退会

鈴木康仁（4631）　広島
松田孝一（8362）　山形

INFORMATION インフォメーション

◆四国八十八ヶ所歩き遍路
逆打ち④高知・徳島

山行委員会

四国八十八ヶ所1200㎞を、春2回秋2回の区切り打ち1年で歩きます。2024年は閏年、逆

図書受入報告（2024年8月）

著　　者	書　　名	頁／サイズ	発　行　者	発行年	寄贈／購入別
萩原浩司	萩原編集長の山塾2 ：登山力	191p／21cm	山と溪谷社	2024	著者寄贈
小川さゆり	御嶽山噴火 ：生還者の証言/ヤマケイ文庫	344p／15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
横田和憲	名古屋からの山岳展望 /爽BOOKS	138p／21cm	風媒社	2024	出版社寄贈
田中正彦	新潟の道の無い山	324p／21cm	白山書房	2024	著者寄贈
田中正彦	新潟の静かな山 ：道なき山を訪ねて	352p／21cm	新潟日報メディアネット	2024	著者寄贈
植田彩芳子 他編	石崎光瑤 ：生誕140年記念	257p／26cm	毎日新聞社	2024	個人寄贈
専修大学体育会山岳部100周年実行委員会 編	こまくさ ：創部100周年記念誌	210p／27cm	専修大学体育会山岳部	2024	発行者寄贈

打ちの年で、順打ちの3倍のご利益があると言われています。4年に一度のチャンスです。お大師さんに会いませんか？

今回は27番神峯寺から1番霊山寺まで。四国八十八ヶ所霊場会の公認中先達2名が遍路・巡拝服装などの作法をお教えします。お遍路はどこから始めても良く、一部行程のみ参加の方はご相談ください。

日程　11月12日㈫～11月23日㈯
　　11泊12日
集合　11月12日㈫土佐くろしお鉄道・のいち駅。集合10時30分
行程　12日＝のいち駅―香南　13日＝27番―奈半利　14日＝26番―室戸　15日＝25番―佐喜浜　16日＝海陽　17日＝23番―日和佐　18日＝22番―阿南　19日＝21番―勝浦　20日＝19番―国府　21日＝16番―神山　22日＝11番―吉野川　23日＝7番―1番―坂東駅（17時ごろ解散）
歩程　1日20～30㎞余（健脚向き）
費用　参加費1万円（通信費、写真代など）、1日1万円（宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代）、傷害保険は各自お掛けください。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。
定員　8名（先着順）
申込み　11月1日㈮まで　数見（すみ）直（ただし）
☎090―7204―4668
✉sanko@jac.or.jp

◆GO　TO　山岳祭　木暮祭と魔子の山

山行委員会

山梨県北杜（ほくと）市で開催される木暮祭に参加します。そして、獣や家畜、赤ん坊をさらって食べていたとされる、魔子じじいが棲んでいたと言われる恐ろしい話のある魔子の山に登山します。

日程　10月19日㈯～20日㈰
集合　10月19日㈯　15時30分韮崎駅
行程　19日＝韮崎駅＝みずがき山リーゼンヒュッテ（泊、懇親会）　20日＝みずがき山リーゼンヒュッテ―魔子の山―木暮祭＝韮崎駅
歩程　20日　2時間
費用　2万円（宿泊費、現地交通費、懇親会費ほか）韮崎までの交通機関は各自準備
定員　10名程度
申込み　10月10日まで　柳田泰則
☎080―6967―2827
✉山行委員会　sanko@jac.or.jp
＊申込み受付後、詳細を参加者にお知らせします。

◆2024年フォーラム「登山を楽しくする科学（XIV）」

科学委員会

日時　11月9日㈯　13～17時（受付は12時30分から）
会場　立正大学品川キャンパス「ロータスホール」品川区大崎4―2―16（JR大崎駅北改札西口から徒歩5分「山手通り口」からお入りください）
演題と講師
1・「野生動物とどう共存していくか」須田知樹氏（立正大学地球環境科学部教授、日本山岳会会員）
2・「スマホGPSで登山を楽しく～スマホGPSによってなにができるか、その楽しみ方～」近藤雅幸氏（日本山岳会会員）
3・「チベット医学と祈り」小川康氏（森のくすり塾）
申込み　10月25日までに木曽雅昭へ　氏名（ふりがな、会員は番号）、住所、電話番号を✉kagaku@jac.or.jpへ。
定員　先着150名（受講票は発送しません。定員超過時のみ連絡します）
費用　資料代500円（当日、学生無料）
問合せ　木曽まで
☎090―2536―7170

◆一般および会員向け自然保護講演会　参加者募集

東京多摩支部

主催　東京多摩支部自然保護委員会
演題　「登山道の維持管理と自然環境の保全対策～私たちにできることは何か～」
講師　登山道法研究会副代表・森孝順氏
日時　10月30日㈬18時30分～
場所　オープンイノベーションフィールド多摩・国分寺館セミナールーム2
定員　60名（先着順）
参加費　500円（資料代ほか）

申込み　☎・Ｆａｘにて　参加者全員の氏名、住所を明記、10月22日㈫までに日本山岳会東京多摩支部（自然保護委員会）河野悠二へ
☎・Ｆａｘ　０４２－５４４－４７３８　✉kyuuji@mwd.biglobe.ne.jp

寄附金および助成金などの受入報告（8月まで）

寄附者など	受入金額など（単位千円）	寄附の目的、その他
石川　春　様	50	登山環境整備寄附金
山田　新　会員	150	永年会員からの寄附金
匿名希望	1,000	東海支部活動振興寄附金
中山　茂樹　会員	100	YOUTH CLUB活動支援寄附金

◆中村好至恵展

1・水彩画　中村好至恵　山の絵展

会場　安曇野山岳美術館　〒399－8301　長野県安曇野市穂高有明3613－26
☎0263－83－4743
日時　9月21日（土）～11月20日（水）10時～16時
休館日　木曜日
入館料　700円

当美術館での初めての企画展。80点余りの全国各地の山の、現場で描いた水彩画を展示。

2・「山の絵」展　中村好至恵

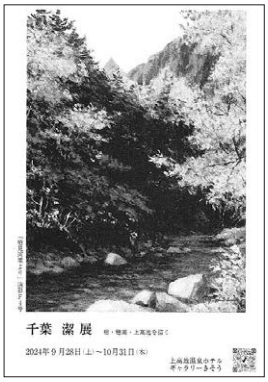
@Ogawa vil.-NAGANO

会場　ふるさととらんど小川　〒381－3302　長野県上水内郡小川村高府9307
☎026－269－2270
日時　9月26日㈭～10月20日㈰　9：30～16：30
休館日　火曜日
入場　無料

こちらも初めての小川村での展示。広い会場に大作を中心に50点ほど飾る。10月12日㈯13時30分から会場にて画文集より「山の話」3話の朗読会が開かれる。
＊ともに問合せは、作者の「山の絵」ＨＰの「お問合せ」にてお願いします。
http://yamanoe.jimdo.com

◆千葉潔（山岳画）展

―槍・穂高・上高地を描く―



会場　上高地温泉ホテル・ギャラリーきそう　〒390－1516　松本市安曇上高地4469－1　☎0263－95－2311
期日　9月28日㈯～10月31日㈭　7時～16時
入館　無料

画室＝〒390-1241　松本市新村242　☎・Ｆａｘ0263-47-8653

❖編集後記❖

●「北陸新幹線、敦賀延伸記念」と勝手に銘打って、若狭・丹後の山と海、そして、ローカル線の旅を楽しんできました。山は「敦賀三山」の一峰、西方ヶ岳と「若狭富士」の名で知られる秀峰、青葉山ですが、さすがに今夏の低山歩きは汗だくで、こたえました。
●山とともにもう一つの目的は小浜線と京都丹後鉄道。六角精児の「呑み鉄本線・日本旅」（ＮＨＫ－ＢＳ、〝不定期運行〟）が大好きで毎回見ていますが、まさにこの線は呑み鉄ムード横溢でした。特に旧国鉄宮津線（現・京都丹後鉄道宮舞線）の由良川鉄橋は、かつてＳＬ撮影のメッカとして有名でしたが、今回やっと念願かなって渡ることができ、早速、缶ビールをプシュッとやったのでした。（節田重節）

日本山岳会会報　山　952号
2024年（令和6年）9月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　橋本しをり
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社